

令和3年7月1日(木)



つつじが丘小学校
学校だより

つつじ

昭島市立つつじが丘小学校長 上田 祥市

「子供は、どんなときに学ぶのか」

校長 上田 祥市

「校長先生、あじさいの花って木みたいに大きいんだよ。葉っぱには、ギザギザがたくさんあるよ。」と、2年生の子が教えてくれました。子供は、自分で感じたことや発見したことを伝えるとき、生き生きと目を輝かせます。子供の目線で見ると、あじさいの花全体は、木のように大きく感じます。他の葉っぱと比べているから、葉っぱのギザギザに気が付きます。

幼い子供は、よく「どうして?」「なぜ?」と聞いてきます。心理学では、質問期といい、2～6歳ぐらいまでをいうそうです。

「どうして髪がはえてないの?」私も時々1年生に質問されます。「なぜだろうな…、どうしてだろう。わかったら教えて。」と、ごまかし気味に答えます。「(そんなことを校長先生に言ってはいけません。)」などと、周りの大人が言うと、余計に傷つきます。

毎日質問攻めを受ける親たちは、きつとうんざりして、「知らない」と一言で終わらせることがあるのではないのでしょうか。しかし、この「なぜ?」「どうして?」を連発するとき、子供たちの脳は、好奇心が高まり、思考力が伸びているときです。そのチャンスを「知らない」の一言で終わらせられることが続くと、子供は「なぜ?」「どうして?」と聞くことは無駄と感じ、思考も止まり、好奇心もしぼんでいきます。

周りの大人が、どうキャッチしてどう返すか、上手なキャッチボールが子供たちの好奇心を引き出し、思考力を伸ばします。

子供たちの中に「なぜ?」「どうして?」が生まれるのは、知りたい欲求です。知りたいことが分かると満足します。満足すると、また次の疑問が出てきます。そのうち、自分で調べる方法が分かると、自分から調べるようになり、何かが分かると、それを人に伝えたくなくなります。知識が増えると、比較したり関連付けたりして、共通点や相違点を見付けたりします。考えを伝え合うと、自分の考えていなかったことに気付かされて、さらに深く考えます。こうして、思考力は身に付くのだと思います。

周りの大人が、子供の疑問にどう向き合うのか。反応しなければ、反応しない子供になります。まず受け止めて「なんでもかなあ。どうしてだと思う?」と寄り添うだけで違います。「〇〇で調べたら、分かるよ。」や「一緒に調べようか。」と反応できたら、さらに良いのかもしれない。本を読む子は、その面白さを知っています。図鑑を読む子は、写真や文からたくさんの情報を得て、本物を見たいと、行動し始めます。

子供たちの学びは、周りの反応で大きく変わってきます。教師や親は、子供たちの知的好奇心を刺激し、知りたいことが分かる方法を示してあげることが重要です。

本校は、子供たちの知的好奇心を引き出し、45分間で連続した思考が行われるための視点を明らかにしながら、授業改善をすすめていきます。